

学び続ける子どもと教師を支えるカリキュラムマネジメント

—カリキュラム開発における評価と改善のプロセスの考察を通して—

新井 雄太 高度教職開発コース 教育課題探究プログラム

キーワード：カリキュラムマネジメント，カリキュラム開発，学び続ける教師，SBCD

1. 研究の背景と目的

現在，カリキュラム開発が教育現場の教師にも求められている。私の実践は，目的や方法が既に決められた稲作学習（学年活動）や指導時期が遅れないように進める教科学習など，前年度踏襲の活動や教科の枠に捉われ予定調和の学習が多かった。教師が学校で子どもたちに教えるべき教育内容は，学習指導要領により公的に規定されている。しかし，教師に求められているのは，教科の垣根を越えた統合的な学びの中で子どもが社会で生き抜く主体的な力を育てることである。そのためには子どもの学びの文脈に応じたカリキュラムマネジメントが必要であると考え。鄭（2001）は，1970年代に経済協力開発機構（OECD）から提唱された「学校に基礎をおくカリキュラム開発（School-Based Curriculum Development：SBCD）」の概念を基に，カリキュラム編成の主体を教師に置き，実践的知識を生かした動的なカリキュラム開発の重要性を指摘している。

また，鄭（1999）は，教師を中心とする参加者間，開発段階間，カリキュラムの構成要素の間で行われる「相互作用」が，動的なカリキュラム開発の維持に必要なリソースであると述べている。つまり，教育環境が絶えず変化する中で行われるカリキュラム開発に必要なリソースは，教師が子どもの学びの文脈に生じている相互作用を捉え，絶えず主体的に発展させるプロセスにあると言える。松井（2021）は，カリキュラムマネジメントの成立要件について，学校と教師が主体となって編成するカリキュラム観を改めて創造することを挙げている。今ある社会に子ども達を適合させるための固定化された学習活動の編成ではなく，教師の主体によって「教室の中」で目の前の子供達と織りなされることが重要なのである。また，園部（2017）は，授業で起きる即興的な対話から教師と子ども達が共につくり上げていく長期かつ授業単位でのカリキュラム開発の実践報告例は少ないと述べている。長期かつ授業単位での本研究の考察は，SBCDの視点の再考につながり，教師が編成の主体となるカリキュラムマネジメントの在り方を示唆できるのではないだろうか。

本研究は，カリキュラム開発における評価と改善のプロセスの考察を通して，教師の意思決定に影響する要素を明らかにする。その中でも，カリキュラム更新に迫られる子どもからの影響に焦点を当て，教師が意思決定を行う場面や様相を示す。そのために，動的なカリキュラム開発を実践の中核とする長野市A小学校（以下「A小」）での筆者の実践事例を基に分析と考察を行う。

2. 研究の方法とその趣旨

2.1 子どもとつくるカリキュラムについて

A 小では、学級の中核活動を中心に、子どもの実態に応じて更新する年間学習指導計画を「子どもとつくるカリキュラム」と呼び、必要な内容を教科等横断的な視点で編成し、関連を線で示していく。更新は随時行われるが、年に3回（5月、10月、2月）、同僚とカリキュラム更新の契機となった状況を共有、検討する研修会を行っている。

2.2 研究の方法

田村(2020)は、カリキュラムマネジメントの最小単位は単元や授業だと述べている。本研究はこの立場から、カリキュラム開発の主体である教師に視点をあて、子どもとつくるカリキュラムの立ち上げ期や更新の契機など教師の意思決定の過程を検討していく。

主に以下の3つの視点から分析と考察を行う。

- ①教師はどのようなことをカリキュラム編成の資源として活用しているのか。
- ②教師はどのように子どもの側にあるカリキュラムを捉えているのか。
- ③動的なカリキュラム開発の過程で、子ども達の何がどのように育っているのか。

対象学級	中核活動テーマ
2021年2年生38名	藍とのかかわりを通じて、命を感じ、対象を見つめ直していく子ども
2022年3年生37名	鶏とのかかわりを通じて、「命」について見つめ直し 生きていくわたし
2023年5年生36名	木に働きかける中で見えてくるより良い私達の暮らしについて考える子ども

3. 実践研究の過程と考察

3.1 中核活動におけるカリキュラム立ち上げ期の相互作用

2017年の学習指導要領では、教科が相互に関連し合うことで教育課程は機能を果たすことが述べられ、総合的な学習の時間を中核に位置づける重要性が示されており、立ち上げ期は中核となる生活科や総合的な学習の時間の活動の構想が要であると言える。

2021年は、学校内外のリソースや子どもの実態を教師が十分に把握しきれていない状況があり、前年度、草木染めを通した子ども達の学びの履歴を基に、緑色の藍から藍色が出る不思議さが追究意欲となると構想した。題材を「藍と共に育つ私」と設定し、子ども達の学びの履歴から藍の育成と観察、草木染を学習内容に位置づけた。また、1学年での朝顔栽培の経験から子どもが自ら植えた藍を最後まで責任をもって育てていく展開となった。

2022年は「藍から命をもらった」と語る姿から藍に命を感じる子ども達の視点と、動物飼育への憧れや願いを捉え「命をいただくこと」をテーマに題材を構想した。家畜の存在や意味、動物の命を預かる責任などについて考える学習活動を位置づけた。ただの動物飼育ではなく、家畜と自分達のよりよい暮らしを追究していくカリキュラムを構想した。

2023年は、磨いた石の美しさや豊富な種類と特徴の面白さを味わった前年度の経験を基に、木材加工の面白さや木のもつ魅力を題材に社会科や理科等の教科横断的な視点から学びに必要な教育の内容とそのための活動を編成した。子ども達は、石との違いを感じながら、木を磨き込む活動に没頭し自らの手によって変化していく木肌の美しさを探求した。

以上の実践から立ち上げ期では、目標を定めつつも子どもの学びの履歴を基に教師が見出した材の価値から、学ぶ内容や方法について再構成されていった。子どもの側に立ったカリキュラム開発は子どもの文脈に即した連続性のある学びを生み出していくのである。

3.2 子どもの意識がもたらすカリキュラム更新

2021 年の実践では、H 児の「藍の命をもらった」という言葉が、藍への筆者の見方を変えるきっかけとなった。H 児の言葉を契機に「命をつなぐ藍の花」がテーマとなり、一つの種から何十枚もの葉や花をつける藍の生長過程に着目し、一つの藍から多くの命が生まれる不思議さに焦点を当て授業を構想した。単元終末で W 児が語った、「命をつないでいるから藍に終わりはない」という言葉は、前年度、朝顔を育てた経験と連動し、「命」に関する学びが持続的に展開していたと考えられる。

2022 年度では、孵化しない 15 個の鶏卵を前に筆者は埋葬するしかないと考えていた。しかし、「まだ孵卵器に入れて様子を見たい」と言う子ども達の想定外の意見に筆者自身の一方的な考えだったことに立ち止まり、子ども達と共に納得できる方法を考えるために互いの意見を出し合う場を設けた。結果、埋葬することを決断した子ども達は、「生まれてこなかった命に手紙を書きたい」「生まれてきた 5 羽を絶対に守る」と雛への思いをより強めていく。こうして一つ一つの活動に雛への思いを込め、飼育方法の共有、体重のグラフ化、命を感じながらの小屋づくりなど、子ども達は自ら学びの幅を広げていった。

教師の想定外の出来事であった子ども達の立ち止まる姿にカリキュラム更新の契機があった。鄭（2001）が、授業はカリキュラムを媒介として、子どもとの相互作用を通じ、新たなカリキュラムのリソースを創り出していく場であると示すように、子どもの立ち止まりから教師も立ち止まり、学習内容や方法の再構成、評価の妥当性の検討に迫られる。

3.3 子どもとの意識のずれから生まれるカリキュラム

2022 年度の 3 年社会科「昔の暮らし」で、飼っていた鶏を食べていた S さんに焦点を当て、当時の生活を考える授業を構想した。同じ時期、飼育していた鶏が初めて産卵した。卵は有精卵の可能性があり、子ども達は食べるかどうか迷った。話し合いの末、食べることを決断した S 児は、初めて卵を食べた時の日記に、「S さんの気持ちが分かったような気がした」と綴った。一つ一つの事実との出会いで卵に対しての意識が変わる子ども達に、筆者は当初の構想とのずれの広がりを感じた。しかし、子どもの内面にある問いや葛藤が学びにつながると考え、道徳の観点から「いただきます」を通じた「生命の尊さ」の授業を構想したり、卵に関する葛藤を歌作りに結びつけたりなど、新たな学習の展開を模索できた。

2023 年度の総合的な学習の時間で、校内にある身近なリソースとして教師は身近な木の調査活動を構想した。しかし、木を磨き、その魅力に気付くと子ども達は木の加工に興味を示したため、教師は調査活動を見送った。その後、学年末に「木のミュージアム」を開催し、木の魅力や林業の重要性、森を守る人々の存在を校内に広く共有したいと願う学級の共通意識が形成された。この中で、A 児が、「身の回りの木についても紹介したい」という希望を伝えてきた。筆者はこの考えを学級で共有すると、木の調査や樹木プレート製作

に繋がり、教師もこの活動を通じて木の判別や特性を学んでいった。子ども達と教師の間で対象に対する見方や価値観が更新されるプロセスが活動を通じて示唆された。

笹野(2022)が、『意図せざる結果』を生み出す動的な過程に関心を払う必要がある」と示すように、カリキュラムの更新は揺れ動く子どもの意識と教師の意図との交錯の内に再構成される。想定外の子どもの姿を契機に構想時での教師の意図とのずれが生じ、教師もまた新たな価値を見出しながら子どもの文脈に沿ったカリキュラムを編み直している。

4. まとめ

授業状況を捉えてカリキュラムを更新する際の意味決定に影響する具体的な要素として、材の新たな価値の見出し、子どもとの意識のずれ、想定を超えた学びの姿の捉えの3つの要素が影響していることが学級における授業単位での実践で明らかになった(図1)。これらの要素がカリキュラム

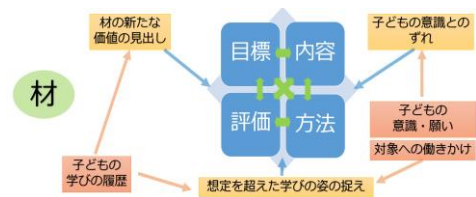


図1 意思決定に影響する要素

出典：筆者作成

に与える影響を自覚し、目標だけでなく様々なアプローチから再構成することが重要であると示唆された。教師は、学校内外のリソースを活用することに加え、カリキュラムの立ち上げ期は、子ども達の学びの履歴や自身の専門分野や教育経験に基づき、柔軟性を持って目標を設定している。また、教師は、子ども達の経験を基盤とし、子ども達の学びの文脈に沿ったカリキュラムを絶えず構築していく。その過程で教師自身も子ども達との相互作用から学び続けているのである。こうした、動的なカリキュラム開発の過程では、子ども達の成長と教師の柔軟なアプローチが有機的な学びを促していると言える。残された課題は、小学校現場における学級単位でのカリキュラムマネジメントの実践事例しか対象としていないことである。今後、中学校現場や教科担任制を導入した学校での実践を通して、教師間の連携体制の構築とカリキュラム開発の推進を図る必要がある。

文 献

- 1) 鄭栄根(1999)「カリキュラム開発における教師の役割とその遂行過程に関する研究—SBCD(School-Based Curriculum Development)の視点から—」. pp.60
- 2) 鄭栄根(2001)「SBCDによるカリキュラム開発の方法—日・韓学校教育の状況を踏まえて—」山口満編『現代カリキュラム研究』. 学文社. pp.68 - 69
- 3) 松井典夫(2021)「カリキュラム・マネジメントの今日的課題と成立要件の考察—M. SkilbeckのSBCD理論を基点に—」
- 4) 園部友里恵(2017)「カリキュラム開発における即興性」
- 5) 田村知子(2020)「カリキュラム・マネジメントの概念と意義」吉富芳正・村川雅弘・田村知子・石塚等・倉見昇一『これからの教育課程とカリキュラム・マネジメント』. ぎょうせい. pp.145
- 6) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』(Web版). pp.37
- 7) 笹野恵理子(2022)「教育課程の基準(学習指導要領)を教科教育学としていかに分析・評価するか—「カリキュラム経験」研究の視角」